

特性好奇心における wanting 傾向と liking 傾向

—質問紙による個人差の測定—

○西川一 二¹

(¹ 関西大学大学院心理学研究科)

キーワード：好奇心 個人差 wanting/liking

Wanting and linking aspects of trait curiosity: Questionnaire measurement of individual differences.

Kazuji NISHIKAWA¹

(¹ Graduate School of Psychology, Kansai University.)

Key Words: curiosity, individual difference, wanting-and-liking

目 的

Berlyne(1954)が、好奇心を新規なもの、複雑なものや不確実なものに興奮し新しい情報を求める動因と定義したことから始まり、1950年代以降、多くの好奇心研究が行われてきた。近年までに好奇心の領域や機能の分類を試みた研究が多くなされてきた。

Litman(2005)は Wanting-and-Liking という神経生物学的側面から好奇心の位置付けを試みている。Wanting-and-Liking は食べ物、水、薬物のような感覚的刺激に対する反応の背景にある、より一般的な好みや快楽に関する動機づけの二側面を、間接的な学習報酬も加えて、神経生物学的にとらえた理論である。Wanting は中脳辺縁系ドーパミンの活性化により喚起され、報酬に関連した誘因を生じさせ探索行動を動機づける機能を持つ。Liking は側坐核でのオピオイドの活性化にとまなうものであり、関連する刺激物に対する評価を調整し、快楽の効果や感情評価を予測する機能を持つ。また Wanting は、与えられていた刺激の剥奪など、過去の経験に依存して喚起される欲求経験である。Liking は報酬の予測に対する喜びを示す。特に Wanting は、薬物中毒や衝動買いやギャンブルなどの行動中毒との関係性があるといわれている。

Litman, & Jimerson (2004) では、好奇心の中に情報の曖昧さを解消するため(剥奪感)の探索行動といった側面を見出し curiosity as a feeling deprivation (CFD) と名付けた。一方、様々な事柄に触れている事に楽しく感じるといった好奇心の側面を curiosity as a feeling interest (CFI) と命名し、それら2つの下位尺度を構成する好奇心尺度を作成した。Litman(2005)は、CFI と CFD を Wanting-and-Liking との関連で位置付けているがこの位置付けには疑問が残る所がある。以後の研究(Litman, 2010)で CFI と CFD の弁別的妥当性を試みているが完全とは言い切れない結果であった。Mussel(2010)は、CFI と CFD の弁別的妥当性について批判している。

好奇心研究は海外で研究が進んでいるが、好奇心の複数の側面を適切に位置付けた理論は未だ定まっていない。本研究では、Wanting と Liking という動機づけの二側面に基づく好奇心尺度の開発を試みた。

方 法

調査は、大学生を対象として、実習や授業時間内または休み時間中に実施された。質問紙回答前に文書と口頭で説明合意を得た上で回答してもらった。実施期間は2011年7月、9月、11月(2回)、12月の計5回調査、計816名であった。作成した尺度項目は、Wanting-and-Liking に基づき「Wanting」「Liking」傾向を測るため下位2尺度を構成するように制定した。前者は、不完全や曖昧な事を嫌いそれら解消するために情報収集をするなど項目を制定し、後者は様々な事に触れる事や新規や予期を好むなど項目を制定した。好奇心尺度作成にあたり7、9月(229名、189名)50項目から始め、11月(153名)39項目、11、12月(169名、76名)20項目と、分析結果に

基づき順に選定を行った。回答は、各項目に対し「1. まったくあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. とてもよくあてはまる」の5件法で行った。分析は因子分析(主因子法、プロマックス回転)で行った。項目の選定は、スクリー基準や解釈より2因子構造が確認にされた後に各因子の負荷量の低いものまたは不安定な項目から項目の除外を行った。

結 果

表1 好奇心尺度の項目と因子分析結果(パターン行列)

項目	1	2	共通性	平均(SD)
13. 真になった視点から新しいアイデアを考へることが好きだ	.894	-.154	0.46	3.4(1.10)
17. 自分の創造力を生かして新しいアイデアを生み出す	.771	-.147	0.58	2.95(1.12)
1. 新しいアイデアをあれこれ考へる	.744	-.168	0.47	3.24(1.06)
2. 新しい事に挑戦することは好きだ	.738	.043	0.55	3.47(1.11)
Liking ($\alpha=884$)	.653	.032	0.45	3.20(1.20)
18. 誰もやった事のない物事にとまなう	.620	.127	0.37	2.93(1.02)
11. 今までやったことのない課題にとまなう	.571	.072	0.51	2.90(1.10)
6. どこに行っても、外に出て新しい物事や経験を探す	.546	.125	0.38	3.00(1.12)
8. 何事にも興味関心が強い	.510	.013	0.43	2.73(1.20)
14. なじみのない人や出来事、場所を喜んで受け入れるタイプの人間である	.486	.281	0.51	3.47(1.07)
5. 新しい事を学べると思うと期待でワクワクする	-.168	.699	0.48	3.15(1.11)
4. 答えが分からない問題があると落ち着かないので、その事についてずっと考へる	-.120	.746	0.29	3.37(1.08)
19. 解答を理解できないと気持ちが悪く、なんとか理解しなければと思う	-.073	.745	0.59	2.90(1.10)
7. はっきりした明快な答えが出るまでずっと考へる	-.067	.714	0.27	3.02(1.13)
3. ある考えを理解するために必要な知識をすべて学ばないと満足できない	.036	.699	0.52	3.56(0.99)
10. 分からない事があると居心地が悪いので、一生懸命理解しようとする	.198	.696	0.31	3.09(1.09)
15. 物事を学ぶ時には、徹底的に調べたい	.096	.602	0.51	3.02(1.06)
9. 予期しない出来事が起きた時、原因が分かるまで調べる	.023	.547	0.45	3.12(1.08)
16. 問題を解くために長時間じっくり考へる	.208	.481	0.48	2.97(1.04)
20. 問題を解決するために努力を怠らない	.311	.317	0.37	2.89(1.23)
12. 問題を解決するまで考へてみたい				
因子相関	.486			
累積寄与率			44.9%	

20項目までに項目選定し11、12月(245名：男性95名、女性150名、平均年齢19.8歳)調査で行った結果、2因子が得られた(表1)。信頼性係数は、Liking、Wantingともに十分な水準だった。因子間相関は中程度の値を示した。各尺度得点の性差はLiking尺度では(t(243)=2.319, p<.05)、Wanting尺度では(t(243)=2.959, p<.01)とともに男性の方が高かった。

考 察

今回、調査を繰り返しながら50項目から20項目を選定したが、分析結果を見ると何項目か不安定な項目があった。よって再度調査を行い項目の選定を行う必要があるだろう。また、妥当性を調べるためにBig5の開放性や他の好奇心尺度、認知的完結欲求などとの関連を調査する必要があるだろう。

引用文献

- Litman, J. A. (2005). Curiosity and the pleasures of learning: Wanting and liking new information. *Cognition & Emotion*, 19(6), 718-814.
- Litman, J. A., Crowson, H. M., & Kolinski, K. (2010). Validity of the Interest- and Deprivation-type epistemic curiosity distinction in non-students. *Personality and Individual Differences*, 49(5), 531-536.
- Mussel, P. (2010). Epistemic curiosity and related :Laacking evidence of discriminant validity. *Personality and Individual Differences*, 49(5), 506-510.